

---

# お嬢様と執事様

炉漣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様と執事様

### 【Nコード】

N7415Y

### 【作者名】

炉漣

### 【あらすじ】

南條来人は気付けば見知らぬ無機質な部屋にいた。まったく知らない景色に困惑しながらも『ふっきれた』南條は部屋を飛び出し、そこが巨大な謎の施設だと知る。

その施設で出会う場違いなドレスを纏った少女ディエナと共に南條は施設からの脱出を図る。

だが、その行く手を阻むバケモノ達。

そして、巻き込まれる南條達。

パンデミック×ファンタジー的な感じで。

昔「i」のべる「っ」携帯小説サイトで書いてたモノを書き直してるものです。

## 1・prologue

まず始めに確認しておかなければならない事がある。  
知っているか否か、だ。

知らないと言うのであれば心して掛かるが良し。知っていると言うのであれば新たな過程に期待すれば良し。

### 1・始動。

南條来人は単純に『拉致された』と疑っていた。

何が起きたのか、誰がこんな事をしたのか、答えを求めるよりも前にまずそう思った。そして次に、何をしていたか、と幾日分前の物か分からない記憶を掘り探した。が、見つからずに唸る他なかった。

と、言うのも。

「ここは何処だったんだ……」

コメカミを潰されているかのような痛みが走り続ける頭を出来るだけ刺激しないよう起き上がり、辺りを見回せばそこは南條の全く知らない場所だった。

正確には部屋、畳六畳程の無機質で、かつ近未来的雰囲気を感じさせる眩いばかりに真っ白く輝く空間。ここはそうだ。

部屋には近づいたら斜めにスライドして開きそうな扉が一つ。その他にはまったく何も無い。

記憶を失っているような感覚は少なくともない。一応、一定時間前の短い期間の記憶がなくなっている様な不思議と浮かない気分ではあるが、状況が状況だけにそれが本当に記憶云々によるモノとは言いい切れない。

(何がどうなってやがる……? ここはどこだったんだよ?)

いつの間にか意識を失っていて、気付けば全く見知らぬ謎の部屋。拉致された、と疑ってもしかたがない、と言い切れる程の状況である。

ここでまず何をすべきか。その答えは目の前にポンと置いてある。慌てふためいて騒ぐより、目標があるのだから動いた方が無駄は省けるだろう。

南條はそういう男だった。

生まれつきの明るめの茶髪はやたらと人目を引き、これまでも南條が望まない嫌な刺激を引き起こしてきた。若いうちに引き起こされる想像の容易いことであるが、そんな『つまらない』刺激の数々のおかげか、南條は何か異常が起こった場合でも冷静でいれる体質を得ていたのだ。

こんな状況だというのに気だるそうに後頭部を掻きながら目の前のその扉へとゆっくりと歩いて近づく。

扉の一步手前まで来たところで、見た目通りの動作で扉は自動的に開いた。

と、同時、その先に見えるはずだった真っ白い廊下、よりもまず腐った肉と嘔吐物を混ぜた様な腐臭が南條を襲った。

吐き気を催す程の匂い。その原因は明確だった。

まるで、待機していた、と言わんばかりに扉があつたその場所

つまりは南條の目の前に、一つのドス黒く淀んだ影があつた。

「……ツクせえー！」

突然現れた影と漂う腐臭に驚き、自然とそう叫んで南條は突然として現れたその影を避ける様に身を引いた。

影は揺れる様に歩き、少しばかり遅い速度で南條の目覚めたこの部屋へと侵入してきたかと思うと、歩幅に合わせながらゆっくりと方向転換し、南條と向き合った。

「あああああああ、……、ああああああアアアああああアああああアあああ」

影はゆらゆらと左右に揺れながら一步、また一步としつかり無機

質な床を踏みしめて南條へと迫ってくる。

「お、おい。なんだよお前……」

鼻をつまみながら、嫌そうに南條は言う。

牛糞に顔を自ら近づけて嗅ぐ臭いが近づいてくるのが恐ろしくて、南條は視線を斜めしたに落として、決して目の前の影には視線をやらず、迫る影に合わせて一歩、また一歩と後退する。

(すげえぞ、この臭い！ 強烈なんてレベルじゃねえっての！！)  
うげえ、とこみ上げてくる吐き気に堪えながら、

「なんだよお前」

嫌そうに訊く。が、先程も聞いた様な気がして、返事が来ていないことに気付いた南條は面を上げて影に訝しげな表情で影を確認する。

「……、なんだよ。おっさん」

禿面のサラリーマン、中間管理職を連想させる様な中年男性だ。

「おおおおおおお、アアアオああああああああああ」

その男性はまともな人間とはとてもじゃないが思えない呻き声を上げながら、ふらふらと南條に近づいてくる。

血走った目に、散らかす様に口元に塗れたギラギラと光る涎が不気味さを演出している。

どうみても、ジャンキーだった。

「なァッ!? 薬でもやってんのかよおっさん!?!」

白目からたまにチラつく黒い瞳が南條を見下ろす。半分だけ開いて皮脂を混じらせてギトギトと嫌に輝く涎が飛び散って南條に掛かりそうになる。

南條がいくら呼びかけようとも、男性はその不気味な様を振りまきながらヨタヨタと南條に迫るばかりでうんともすんとも答えはしない。正直その様は、聞こえていない様にも見えた。

耳が聞こえない、と言うよりは脳が認識していない、状況や様子から言ってそっちの方が正しいだろう。

「きったねえな！ くっそ！」

何にせよ、ジャンキーなんかとは関わりたくない、と南條は男の脇を抜けてさっさとこの部屋から出よう、と考えた。

今見ている限りでは、男性の動きは遅い。とても、と言っても過言ではない程に異様に遅かった。これならばサツと横に抜けて走れば良い。

「ああああああアアアああアああオオオオオオオオオオオオオオオオあああ」

男性は相変わらず単純な動きで南條へと迫ってくる。

一歩、近づいてきたそのタイミングを南條は見計らって走り出した。

身を屈め、小学生時代を思い出させる様な全力での走りを取った。これでこんな悪臭とはおさらばだ、素直に、それこそ小学生の様に喜んだ。

が、その時だった。

男性の横を駆け抜ける丁度その時、体勢を低くした南條の目の前に、ポロリ、と肉肉しい何かが落ちてきて、ビチャリ、と床にその先を衝突させた。

その肉肉しい何かは細長く、その先を地面につけているが根元は男性へと続いている。

反射的に、南條は理解するよりも前にその肉肉しい何かを目で辿った。辿る他の選択肢がなかった。それ程のモノが目の前にあると脳のどこかで理解していたのかもしれない。勿論、本能も理性もそれを拒んでいたのだが。

「……………あ、ア？」

辿りながら、既に行き着いたというのに視線は泳ぎ、現実の理解を拒否する。否定する。

肉肉しく、長いピンク色のそれは男性の横つ腹から溢れる様に飛び出し、垂れ下がっている。その先はドス黒く、またやたらと赤い色で無機質かつ異常に明るい床を汚している。

鮮血、ではない。そんな新鮮味の感じれる赤みはまったくな

い。赤と例えるのが億劫になる様な赤い跡が床に引きづられて尾を引いている。

「は？ え、ああ!？」

南條は思わずそんな頓狂な声を漏らした。

言わずもがな、男性の横っ腹から垂れ下がった、それを、途中で途切れた腸だと気付いたからだ。

気付いた、そうは言っても状況を把握するまでには至らないし、何故目の前にこんなモノがあつて、どうしてこの男性はこんな姿なのか、と処理しきれない事柄が多すぎて南條の思考能力は一旦活動を停止してしまっていた。

「おおおおオオオオオああアおおオアアアああああああ」  
動きまで止めてしまった南條の頭上から、男性の腐臭と共に『腐った』手が伸びてくる。

(な……、なんだよコレ……)

本来そうであろう、そんな有り得ない空想上の出来事からワンテンポ遅れて、今まで腐臭に急かされていた吐き気とはまた違う、異常な程の量の嘔吐物が巻き戻される様な吐き気が南條の全身を駆け巡り、南條はえづく。

「があっ、げっ……げほっ！ ごほ！」

思わず全身に入っていた力が抜け、地に膝を着いてしまう。

結果、降りかかってきた男性の手を回避したのだが南條はそれに気付くはずもない。

なんとか吐かずには済んだのだが、あんなモノを見た後では南條も顔を上げる気にはなれない。目を上げるだけでも臓物が目に入る可能性がある、そんな状況で顔を上げるなんてとてもじゃない。

「な、なんだよ、畜生」

吐き戻したわけではないが、口をティーシャツの袖で拭う。

動きたくなかった。このままだ床を見つめているだけでよかった。

気付けば全く知らない質素な部屋にいて、出ようとすれば臓物丸



出しのジャンキー中年男性に出会ってしまつ。

なんだこの状況は、と呆れた。

なにやってるんだ俺は、と呆れた。

そもそも、なんでこんな状況下に自分が置かれなくてはならないのか、と呆れた。

そう思うと、気持ち悪さや呆れよりも、まず苛立ちが募つた。

何を惚けているんだ、とつと立ち上がつて目の前の意味不明なおっさんをぶつとばして先に進んで真実を確かめろ。自分をこんな事にした奴を叩きのめしてやれ。

曲がつた考えだ、という自覚はあつた。

(ああ、くっそ)

今まででも似たような経験はあつたのかもしれない。勿論、数あるソレは思い出せる様なモノではないのだが。

(めんどくさい。ほんつとめんどくさい。なんだよ畜生。ああ)  
様々なことが頭を駆け巡つた。

自覚はなくとも、この状況が『命の危機』であることを察していたのだ。そうして走馬灯の様に頭の中で溢れた考えなり思いなりは全て南條の『ふつきれる』までの道筋になっていた。

「ふざけんなよ畜生が！」

自身に気合を入れる様に叫び、南條は意気込んで立ち上がる。

すぐ目の前には腐臭と共に禿面の中年男性の歪んだ顔。見れば見るほどそれは人間の表情ではないと気付くが、ふつきれた南條にそんな事は関係なかった。

ただ、目の前にいるそいつをぶつ飛ばせ。感じた嫌悪感の倍返してやれ。

南條は腐臭漂う中でも構わず、思いっきり深呼吸して見せた。男性の手が目前まで迫っているというのに、だ。

「ああああアアアアアアア、オオオオああああアオオオああああ  
あ」

部屋には男性の汚い呻き声のみが蝕むように広がる。そんな部屋

を覆すかの様な大声で、南條は声を上げた。

猛獣の雄叫びをも連想させるソレは目の前ば男性の呻き声は勿論掻き消したし、腐臭さえも吹き飛ばしたかと思う。

だがそれよりも、部屋には鈍い音が印象的に轟いた。

ゴッソ！ とありふれた衝突音が弾け、部屋の中で短く反響した。

南條の強烈な頭突きが男性の額を撃った音だ。

南條の額は赤みを持ち、男性は 大きく後方に吹き飛んだ。そのまま入り口付近に尻餅をついてゆっくりと立ち上がるうとする仕事草を見せる。

「ふざけやがって！ マジで意味わかんねえっての！」

一撃食らわした事で満足、とまではいけなかっただろうが、南條はそれで『ふつきれた』のだ。

よたよたと、生まれたばかりの小鹿の様なおぼつく足取りで立ち上がるうとする男性に吐き捨てる様な言葉だけを置いて、南條は扉の向こうへと飛び出したのだった。

## 2・接触(前書き)

南條来人、謎の施設を探索

## 2・接触

### 2・接触。

「ったく。こん中は一体どうなってやがるんだ？」

一人訝って不満げにそう呟くのはミディアムヘアの茶髪に、整った顔立ちの青年南條来人だ。

いつの間にか見知らぬ部屋へと何者かの手によって運ばれ、あやふやな記憶の中で目覚めた南條は帰路を探して部屋から飛び出した。飛び出した先、その先、曲がり角を曲がった先、階段を上がった先、全てに見覚えはなかった。

どこに向かおうとも出口は見つからず、近未来的なデザインの真っ白な壁といくつかの小部屋が延々と続く通路をひたすら歩きまわった。南條がこんなここにいる以上は、何者にしろ『人間』がいなければ可笑しな話だが、それを肯定するかのように人間の影は一つとして見当たらなかった。

人影　　思えば先程の中年男性。彼は何者だったのだろうか、と景色の変わらない廊下を歩きながら南條は考える。

思い出したくもないモノを見せられ、感じさせられた。異常なまでの腐臭に横つ腹から露出した干切れた腸らしき肉肉しい何か。そして呻き声にイカれた目。チラつくテレビの様に見え隠れした黒い瞳の不気味さは思い出しただけで身を震わしてしまう程の恐怖感を与えてきた。

（まるでゾンビだ。あれじゃ……）

思い出せば思い出す程、南條は眉を潜めた。

「はあ」

嘆息し、一度考えを切り替える。

もしかすればあの男性はただの薬中で、南條と一緒に偶然こんなところに連れて来られたのかも知れない。そう信じて考えを別の物に向ける。

先ず、何をすればよいか、だ。簡単、歩けば良い。何かを見つけたらそちらへと赴き、それに見合った行動をすれば良い。出口を見つけたら逃げ出す、人間を見つけたら話掛けて協力してもらおう、といった具合にだ。

だから、南條はひたすらに代わり映えない景色の中を歩き続けている。

廊下の両サイドには部屋への入り口と思える斜めにスライドして開きそうな近未来的デザインの扉がいくつかならんでいるが、生きた人間がいればなんらかの行動を起こしてとつくに部屋から出ているだろう、と南條はあえてその扉の先を見なかった。その先がまたどこかへと続く可能性だつてあるが、南條が始めにいた部屋の出入り口であった扉とデザインは全く変わらず、ココに何か『実験的』な、『施設の』な雰囲気を感じ取ってからは、あの扉は個室だ、と思つて時間を無駄にしない行動を取っているのだ。

ここがどこで、地上なのか地下なのか分からない状況で、やっと南條は一つの発見をする。

「……………あ、ど……………つて……………よ」

不意に、聞こえて来たその『声』。いや、声とも呼べるほどにハッキリとは聞こえない。が、それは声だと南條は信じた。

「あ？ 声？」

どこからともなく聞こえて来た声に反応し、一応に辺りを一瞥するが相変わらずの光景が続くだけで何処かに人影があったりなどはない。見える範囲での可能性で言えば、廊下に並ぶ扉の先であるうか。

と、いつても廊下に並ぶ扉は見えるだけも一 近くある。

それを一個一個開けて確認するよりは、

「誰かいんのかアツ!？」

叫んだ方が早かった。

南條の怒声に近いソレは一直線に伸びるこの白い廊下に響き渡っただろう。

そもそも、今聞こえた声が『人間』の物だっという確証なんてない。先程見たあの中年男性の様なジャンキーかもしれない。が、南條には今、その道しかないのだ。

自身の声が廊下の壁に反響してエコーする中で南條は黙り、返事を期待して待つ。

「……………」

反響した声もあつという間にフェードアウトし、消え、静かな空間が南條の下に戻ってくる。

「……………」

耳を澄ます。ここまで集中したのはいつ以来だろうか、とついっと思ってしまふ程に今の南條は真剣に耳を澄ましていた。僅かな音でも良い、反応を示してくれ、と南條は返事を期待する。

叫んでから一 秒ほど経ってからだった。

「誰かああ！！」

「ッ！？」

やっと、というタイミングで期待以上の反応が返ってきた。

声は近い。どこかの部屋で今目覚めたばかりの南條と同じ立場の人間がいるのだろう。

今度の声は長い叫びで、尾を辿れば大体の位置は把握できた。南條は追ってその扉に向かう。

扉の前に立つとやはり斜めにスライドしてそれは開き、中の様子を南條に突きつけた。

まず目に入ったのは薄手の青いドレスを身に纏ったブロンドの少女。

顔を見る限りは外国人だ。

が、そんな事よりも、

「な、なんだよソレ……」

南條は部屋の光景を見て思わず絶句した。

部屋の大きさは南條が目覚めたソレよりも少しばかり広いように感じる。

部屋の中心にブロンドの少女が座り込み、血まみれの燕尾服を着た初老の男性を抱きかかえている。見るからにその血は初老の男性の物だ。少女のドレスにも鮮血がべつとりとこびりついているが、それも恐らくは男性の物で、少女に傷はない様に思える。

（な、何がどうなってやがる！？）

少女に抱かれる男性は明らかに『死んでいる』。手当てしても助からない状態、ではなく既に絶命しているのだ。勿論、南條は死体なんて見たことはない。が、それでも見て『死んでいる』と分かる程の状態だったのだ。

南條が鮮血の臭いに当てられ、考えをとめて金魚の様にただ口をパクパクと開いていると、不意に少女の顔が上がって、

「助けてよ……」

すすり泣く声でそう『命令』された。

少女の顔は精巧に作られた人形の様に整いすぎていて、良い意味で南條は同じ人間とは思えなかった。初めて芸能人を生で見たときのような気持ちがかんが状況ながら僅かに心を躍らせた。巻き毛の金髪は空気よりも軽く感じる程にふわふわ揺れていて、思わず手に取りたくなる。透き通った真っ白い肌は西洋人を連想させる青い瞳とブロンドによく似合っていた。

一言、美女だった。

その潤んだ瞳に見つめられて、南條は思わず怯んだ。

そんな南條を急かす様に、

「助けて！」  
美女の声が部屋に轟いた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7415y/>

---

お嬢様と執事様

2011年11月22日03時12分発行